言語発達遅滞分科会　　静岡市立袖師小内 幼児ことばの教室

・保護者との信頼関係を築いて、安心して話せる環境調整が、子どもの成長にとって望ましい事を再認識出来ました。
・保護者との信頼関係や、保護者が安心して子どもに接することができるための「環境調整」を大切にすることで、子どもの状態が改善したり、成長が見られたりすることに、深く影響することを改めて感じました。
親子インタビューをやってみたいなぁと思いました。
・VTR や図などがあると、よりイメージがしやすくなるとおもいました。・子音が抜ける話し方の具体例も、載せてもらえるとありがたいです。・自分たちの指導を振り返り、皆で共有する機会となりました。
・親子インタビューをやってみたいと思いました。親のそばで安心感があって、いいと思いました。場面緘黙ほどではないですが、それに近い子どもがいるので。
・本人も保護者も安心できる場を提供することが通級にとってとても大切だと思いました。
・場面緘黙の可能性のある A さんが、先生の温かい声掛けや配慮により、グループ活動で少しずつ話ができるようになって素晴らしいなあと思いました。信頼関係を築くことに大切さを改めて実感しました。　ありがとうございました。
・ことばの教室は、子供の様子や指導、課題を保護者とシェアして子供を支えられることが大きなメリットだなと感じました。
・子どものやる気スイッチを探す、というテーマからとても興味深かった。 いかに、その子のやる気スイッチを探していったのかが、分かりやすく、先生方の丁寧なやり取りの賜物であると感じた。 保護者の方と友好的な関係を築くことが、子どものやる気スイッチになった。という事例がとても印象的だった。
・話さない子どもに対して、親を巻き込んでいろんな質問をされたことは身近で答えたくなるいいアイデアだと思いました。
・場面かん黙児やきつ音児にどう指導していくのが良いか、日々模索していたので、今回先生方の取り組みを見せていただき、学ぶものが多くありました。子どもだけでなく、同じ苦手さを持つ保護者にとってもグループ指導を取り入れることで、子どもにどう向き合っていけば良いのか分かったり、悩みを分かち合ったりもでき、すばらしいと思いました。 紹介していただいた楽しい遊びや教材、さっそく明日からの指導に取り入れていきたいと思っています。 ありがとうございました。
・幼児の一番の言語環境になる保護者を巻き込んでの実践が、とても参考になりました。保護者の意識を変えることで、指導もスムーズにできた実践が、素晴らしいと思いました。ありがとうございます。
・ことばの教室には様々な課題を抱えた子が通っているので、その子にあった指導ができるように「やる気スイッチ」を見つけられるようにアセスメントを大切にしていきたい。
・浜松市では、場面緘黙や知的な遅れがある子を療育機関をご紹介してつなげていくことが多いですが、一対一の指導で丁寧に向き合うことで、子供の成長がみられすごいと思いました。
・こども一人ひとりに合ったアプローチが大切だと感じました。
・不安な幼児が安心して話せる環境を先生方が作っていて、幼児と保護者に寄り添った指導をされているのが伝わりました。
・緘黙、吃音、言語発達遅滞の子供のやる気スイッチの入るポイントがよく分かった。子供によって違うということが

分かり、おうちの方の関りがあるとよりいいと感じた。

・場面緘黙の事例について、普段家で話ができるお母さんと関わりながら通級指導を積み重ねることで、「話す」ことへの不安感が減り、「安心して話す」ことにつながったのだと思いました。

・場面緘黙のお子さんはケースは少ないのですが、毎年来ており、私の教室には今年度二人のお子さんが来ています。二人とも最近少しずつ教室の中で話せるようになってきましたが、毎年悩みながら関わっています。今回事例として発表してくださってとても参考になりました。緘黙のお子さんは、子供の指導も大切ですが、保護者への支援も重要になってきますね。そのあたりも参考になりました。もう一人の言語発達遅滞のお子さんの事例ですが、言語発達遅滞のお子さんは毎年増えており、このお子さんたちの指導は難しくいつも指導の仕方に悩んでいましたが、今回のBさんの事例はとても参考になり、いろいろヒントもらうことができました。「出来なくてもだめじゃない」この通りですね。ありがとうございました。

・ありがとうございました。大変勉強になりました。一人ひとりにあったやる気スイッチをみつけられるように頑張りたいと思います。

・保護者と丁寧につながる効果や、子供の課題の分析がとてもわかりやすくまとめられていた。

・事例が分かりやすかった。

・保護者も含めて丁寧な対応をされていることが良く分かりました。具体的な言葉掛けや場面設定などが盛り込まれていたので、温かくやさしい教室の雰囲気が伝わってきました。事例児の言語面での伸びの変容をもう少し知りたいと思いました。

・緘黙児の支援は難しさを感じているので，とても興味深かったです。準備も大変だったと思います。有難うございました。

・幼児担当です。昨年まで緘黙児の指導をしていました。担当児も同室している母親を間に挟んでの会話をきっかけに、担当者とも話ができるようになりました。その後、他の担当者とも話ができるようになりましたが、他児との関りを広げていくにはどうしたらよいのか悩みました。緘黙児は少ないため、吃音グループとの指導を知り、とてもよかったです。もう一人の言語発達遅滞のお子さんに対しても、保護者をうまく巻き込んでいて、共に楽しみながら指導を行うことの大切さを改めて感じました。

・事例 A 児：細部までしっかり環境調整のなされた丁寧なグループ指導、母親が子供の安全基地になることを狙いとした効果的な指導だと思います。緘黙児に限らず、吃音や母子関係に課題のあるケースにも有効かなと感じました。勉強になりました。事例 B 児：日頃の指導を観察してもらうことで、母親が気づくことが子供の支援の要だと思います。母親の気づきの場として、ことばの教室での指導は大きな役割を果たすとともに、母親が気づき、受け入れ、理解を深めることの大切さを発表から感じました。 ・親子インタビューで、好きなことを聞きあう活動は、とても良いと思いました。好きは、答えやすいし、気持ちもプラスになります。一つじゃなくて、いっぱい出てくるかもしれないです。

・児の支援はもちろん、母のサポートが大きな割合を占めていることを改めて感じました。 ・一人ひとり特性の違うお子さんの指導内容や目標を決めていくのは大変ですよね。特性、生育歴、保護者への対応が大切だと改めて感じました。それぞれの課題を保護者と共有したり、話し合える関係づくりができていてよいと思いました。 ・安心できる場所になっているか、不安を少しでも減らせているか、子についても保護者についても常に気を配ることが大切だと思いました。 ・緘黙の定義、吃音グループでの対応についてはやや疑問がありましたが、表れとして困難さを感じている部分へのアプローチは定義に関係ないし、グループ分けや既存の在り方に関係なくその子に BEST な方法を提供していけばよいので、柔軟な対応ができるとよいな、と参考になりました。 ・親が変わ

れば子が変わる、子が変われば親が変わるということだなと思いました。

・同じ課題を継続して行うことが、子どもたちの自信につながっているなと感じました。保護者にも一緒に課題に参加してもらうことで、子どもが安心して課題に取り組めると同時に、保護者にも指導の意図を理解していただける貴重な場面になるなと思いました。

・緘黙の子の指導の仕方について、悩んでいたので、こういう風にやっていけばいいのかと思って目から鱗が落ちました。なんにもしない、しゃべらないのでどうしたていいのか困っていたのですが、こういうアプローチの方法があるんだと思ったので、今度緘黙の子が来た時には試していきたいと思います。

・アプローチの仕方がとても参考になりました。場面緘黙の子と吃音のグループを一緒に指導する考えはなかったので、こちらでもやってみたいと思います。また、ことば・コミュニケーションのグループ活動も考えたことがなかったので、参考になりました。ありがとうございました。　事前に知らせたり、打合せをしたりすることの大切さを再度勉強しました。また、一緒に考え、慌てずに待つ姿勢など支援者の基本的な姿勢を学ばせていただきました。

・おうちの方からヒントをもらってもいいんだ、安心して話していいんだ、という環境を少しずつ作っていったことがすばらしいと思いました。 ひとつずつもの（色）と言葉がつながっていく指導を根気よく続けることでことばが獲得されていくことが分かりました。 活動の見通しをもたせたり、飽きないように繰り返し練習させたりすることは小学生でも大切なことなので、小学生に合わせたやる気スイッチを探していこうと思います。

・やる気が出てくるとできることも多くなってきます。そのやる気を出させるテクニックが指導者には必要不可欠ですね。ほめて認める事の大切さを感じました。 ・子どもの困り感に気づき、ともに考えて自信がもてるようになる活動をしていく大切さを改めて感じました。 ・自分の担当の子にも緑だけがわからない子がいたのでとても参考になりました。「わからないのはだめじゃないよ」という声掛けが印象的です。自分ももっと積極的に安心できる言葉がけができるようになりたいと思いました。

・幼児教室では特に「子どもが楽しんでやる気になる」ことが重要でだと感じています。共感しながら発表を伺いました。楽しい雰囲気作りにグループ指導を有効に使っていると感じました。

・「みどり」が分からない子に、「みどり」とは何なのかを懇切丁寧に指導されていました。私は「みどり」は自然と覚えていくものだと思っていたので、清水袖師小学校での幼児言語教室の丁寧な指導に改めて驚きました。小さなやる気スイッチを押していくと、大きなやる気スイッチにつながっていく過程がよくわかり、幼児言語教室の重要さを感じました。

・A さんーお互いについてを尋ねる親子インタビューの活動のやり方が参考になりました。指導員の立ち位置や目線への配慮やサポートの仕方を実践に習いたいと思います。 B さんー発音のことしか気にならなかった親御さんが言語教室での体験を通して子どもの困り感に具体的に気づき始めた実践は当に言語教室の目的どおりになっていて素晴らしいと思いました。「わからなくてもいいよ」「分からないことは悪いことではないよ」と繰り返し伝えること大切なポイントだと思いました。

・幼児部でも吃音のグループがあるというのは保護者支援にとっても良いと思った。 ・親子グループは、親子活動を主として、その場に他の人もいるという状況を作っているのだろうかと感じた。 ・園でのあらわれは書いてあったが、家でどのくらい話しているかとか、家族で外出した時はどうかなどの情報がもう少し詳しくあるとよいと思った。その上で、この活動を組んだというつながりを知りたかった。 ・B さんのアセスメントは何でとっているのだろうか、と教室内で話題になった。（2 回目の構音検査とあったのですが、他はどうですか？）あと、4歳0か月「みどり」 の状況から、「年長になった B さんの様子」に至るまでの過程をもっと知りたい。

・子どもへのアプローチの視点、やる気スイッチを探っていく過程、具体的な指導がよく見えて、指導の参考になり

ました。

・場面緘黙の子どもへの関わり方は、とても難しいと思っていましたが、親子インタビューの実践例がとても分かりやすく、参考になりました。・事例２のように幼児言語教室を通して共に経験をすることで、お母さんが子どもの苦手や困り感に気づき、生活の場に活かせるということに繋がるのはとても参考になりました。

・指導者があせらず、親の思いを聞き、子供の様子を見守りながら、「子供のやる気スイッチ」をみんなで探すという指導は、子供にとって大変有効であったと思います。A さんは安心して自分を出せるようになり、だんだんと自信につながっていったこと、Bさんは、伝えたい気持ちが芽生え、言葉を覚えて、それを言えるようになったことなど、この動画を見て、子供の成長が伝わってきました。自分一人でどうしていったらよいのか迷うのではなく、目の前の親子と一緒に考えていく指導を私も実践してみたいです。ありがとうございました。

・「やる気スイッチ」というとあるCMを思い出しますが、発表されたことは、その子に合った支援だと思います。些細な変化も見逃さず、細かな支援をしていると思いました。・保護者を巻き込んで、同じ方向を目指して連携して指導が行われていることが大変参考になりました。・やる気スイッチを探ってあげることが大切だと再確認できました。・個々によりやる気スイッチが違うので、それを見つけることが大切だと感じました。

・場面緘黙のお子さんへのアプローチ方法など、なかなか知る機会が少ないため、勉強になりました。子どもの気持ちに寄り添いながら、やりたいと思う場面を設定することの大切さを、改めて感じました。

・様々な課題を併せ持つ子どもたちを周囲の大人が肯定的にとらえて、楽しい雰囲気の中で関わっていくことで、子ども自身の意欲が持続し、保護者は児童理解が進み・・・全てにプラスに回転していくのだと感じた。 私たちが子どもに何をすべきかは、子どもの見方・捉え方により左右される。子どもをみとる確かな目を持ちたいと感じた。ありがとうございました。

・やる気スイッチを入れるためのご指導が詳しく説明されていてとても参考になりました

言語発達遅滞分科会　質問・回答

Q　分からないのはダメじゃないという声掛けに関してです。それでいいよ、や、大丈夫だよなど受容的な言葉選びを皆さんで検討したりしましたか。

A：できないことはダメなことと思っている子が多いので、日々の指導の中で「ヘルプ」を出せる子どもになってほしいねと話し合っています。

Q　母親が医療への受診を迷っていたそうですが、どうされましたか？　担当者は、応援を続けたようですが、具体的にはどのような言葉で応援しましたか？

A：指導員からは「特性を知って正しい対処をするためにも医療にかかることをお勧めする」と伝えたところ、母親は「モヤモヤしているよりも前に進もう」と決心をして父親にも相談をして受診を決めましたが、同居の祖父母に医療にかかることを反対されてしまいました。そのため、医療にかかることを決心したことや、夫婦間でよく話し合っていることが本児のためになることを伝え、お母さんの意見を応援することを、折りに触れて伝えていきました。

Q　一歩ずつ、ではあると思いますが、　新規場面だった言語教室で発表できるようになり、主たる生活の場である園で彼女の変化が少しでもみられたかということを伺えると嬉しいです。

A：母親から「園での生活発表会で、大勢のお客さんの前で一人セリフが言えた。習い事のチアリーダーのお当番（皆の前で挨拶する）が一人でできた。」との報告をいただきました。

Q 発音のことだけしか心配していない保護者に「ことば・コミュニケーション」を提案する時にどのようにアプローチしていますか？保護者の方が受け入れ易くなるポイントが有れば教えてください。

A：「言葉以外に心配なことはありませんか」と必ず尋ねるようにしています。発音のことしか心配していなくても、園の様子や入級時の様子から、心配な時にはグループ活動のある「ことば・コミュニケーション」の方へお誘いしています。

Q 緘黙の子を吃音グループに、と考えていった流れはどういうものであったか。

A：吃音グループでは、環境調整を目的として親子参加でグループ活動をしていますが、その基となる考えとして、今あるがままの子どもの姿を受け止める「安全基地」の役割を、母親がしてあげるということがあげられます。その姿勢は、吃音の出ている子どもにも、場面によって話せない子どもにも、共通して必要なことなのではないかと考えました。当時、吃音症状が強く出ている同じ年齢の子どもが通っており、その子は吃音を気にせず、ことばに詰まりながらも話したいことを思う存分に話し、それを母親も指導員も焦らずに見守っているという環境だったため、この姿と関わり方を見てもらい、「今の話せない状態をあるがまま受け止める」ことをこの吃音グループで体験したらよいのではないかと考えました。

Q　お母さんの話を丁寧に聞くのは指導で来室された際ですか？その時、Aさんは一緒にいたのでしょうか、それとも他の指導員と共に別メニューをされていたのでしょうか。丁寧に話を伺うことの大切さを感じながら、なかなか

実践できずにいます。良い方法を知りたいなと思いまして。

A：活動の中で、子どもが自由に遊べる時間を設定しており、その間をお母さんと担当指導員との面談時間としています。その中で、話しきれなかった時には指導後に少し時間をとり、話を聞きました。その間、他の指導員が別室で子どもを見守るようにしていました。